

「今、私の晴雨計は！」⑨
「スペシャルオリンピックス
新潟大会を終えて」

平山 征夫

今、私は心地よい疲労と充実感に包まれている。それは表題の大会を無事終えることが出来たからだ。表題大会の正式名称は「2016年第六回スペシャルオリンピックス日本・冬季ナショナルゲーム新潟」である。パラリンピックが身体障害者のスポーツの大会であるのに対し、スペシャルオリンピックス(SO)は知的障害者の大会である。この冬季大会が二月十二日～十四日新潟市と南魚沼市に全国から600人余の選手(SOではアスリートと呼

ぶ)が参加して開催された。私はその実行委員長を勤めたのだが、それが無事終わったからだ。それで冒頭述べたような感情に包まれているわけだが、正確にはこれまで感じたことのない温かな気持ちに包まれているのだ。

スペシャルオリンピックス(SO)は、スポーツ大会と言っても順位を争うのではなくて、日頃のトレーニングの成果とともに発揮しあうもので、そのためディビジョンングという細かな能力別クラス分け(最大8人)をしてから決勝を行い全員表彰する。だからこの表彰台は横長で大きい。事前の準備でその保管場所に頭をひねったぐらいだ。1位はもちろん8位でも表彰されるから皆が

大喜びだ。この大会の3日間を通じて、全力で競技するアスリートたちの輝く眼や、表彰台ではじけるような笑顔に何度巡り合ったことだろう。「トキめけ キラめけ カいっぱい心いっぱい」という今大会スローガンそのもののシーンが私の胸を何度も感動で熱くしてくれた。スローガンの副題「くささえあう笑顔 ひろがる勇氣 感動を 新潟から」が実現した大会だった。

二年前私はSO新潟の理事長として、2016年冬季大会の開催に立候補するかどうか迷っている仲間たちに「2012年の前回大会をあの3・11の翌年福島が開催したではないか。そのことを思えば隣の新潟が開催できな

いとは言えない。そして真の共生社会の実現に向かって大会開催をそのきっかけにしようじゃないか」と述べた。日頃のSOの活動の半分以上が知的障害の子供さんを抱えたファミリーに支えられ、数年前やっと「NPO法人」になったばかりの団体は心細い限りだったが、なぜか私の中に開催引き受けに手を上げさせる何かがあった。一番責任のある大会実行委員長のポストを引き受けなくてはならないのを分かっていたにもかかわらず・・・。

(平成二十八年三月四日)